

玉井

観世小次郎作

前

ワキ

彦火々出見尊

シテ

豊玉姫

ツレ

玉依姫

後

ツレ二人

天女

シテ

綿津見の宮主

地は

龍宮

季は

雑

「それ天地開け始まりしより。天神七代地神四代に至り。火々出見尊とは我事なり。

詞

「さても兄火闌降命の釣針を。かりそめながら海辺に釣を垂れしに。彼釣針を魚に取られぬ。此由を兄命に申せども。唯もとの針を返せと宣ふ間。剣をくづし針に作りて返すといへども。猶もとの鉤をはたる。さらば海中に入り。彼釣針を尋ねんと思ひ立ちて候。わたづみのそことも知らぬ塩土男

の。翁の教へに従ひて。無目籠の猛き心。

歌

「直なる道を行く如く。く。波路遥かに隔て来て。こゝぞ名におふわたづみの。都と知れば水もなく。広き真砂に着きにけり。く。」

詞

「さても我塩土男の翁が教へに従ひ。わたづみの都に入りぬ。これに瑠璃の瓦を敷ける衡門あり。門前に玉の井あり。此井の有様銀色かゝやき世の常ならず。又ゆつの桂の木あり。木の下に立ち寄り。

暫く事のよしをも窺はゞやと思ひ候。

シテ、ツレ一声「はかりなき。齡を延ぶる明暮の。長き月日の光りかな。

ツレ「いとなむ業も手ずさみに。

二人「結ぶも清き水ならん。

シテサシ「濁りなき心の水の泉まで。老いせぬ齡を汲みて知る。

二人「薬の水の故なれや。老いせぬ門に出で入るや。月

日曇らぬ久堅の。天にもますや此国の。行末遠き住居かな。

下歌「くり返す。玉の釣瓶の掛繩の。

上歌「長き命を汲みて知る。く。心の底も曇りなき。月の桂の光り添ふ。枝を連ねて諸共に。朝夕なる、玉の井の。深き契は頼もしや。く。

ワキ詞「我玉の井の辺にたゞずむ処に。其様けたかき女性二人来り。玉の釣瓶を持ち水を汲む気色見えた

り。言葉をかけんも如何なれば。是なる桂の木陰に立ちより。身を隠しつゝたゞずみたり。

シテ詞「人ありとだに白露の。玉の釣瓶を沈めんと。玉の

井に立ち寄り底を見れば。桂の木陰に人見えたり。

是は如何なる人やらん。

ワキ「忍ぶ姿も顯はれて。あさまになりぬさりながら。

なべてならざる御姿。如何なる人にてましますぞ。

シテ「あら恥かしや我姿の。見えける事も我ながら。忘

るゝ程の御気色。形も殊にみやびやかなり。唯人

ならず見奉る。御名を名乗りおはしませ。

ワキ「今は何をか包むべき。我は天孫地神四代。火々出

見尊とは我事なり。

ツレ「あら有難や天の御神の。御孫の尊を目のあたり。

見奉るぞ不思議なる。

シテ詞「いやさればこそ始より。天孫の光り隠れなし。さ

て是までの臨幸は。そも何事の故やらん。

ワキ 「実に御不審は御理。我釣針を魚に取られ。遙々是まで尋ね来る。こゝをば何処と申すやらん。委しく語り給ふべし。

シテ詞 「知ろしめさぬは御理。是は龍宮わたづみの宮。

ワキ 「かく言の葉をかはし給ふ。二人の御名は。

シテ 「豊玉姫。

ツレ 「我は妹の玉依姫。

地 「互に連枝の名乗りして。つゝましながら御神の。

みやびやかなるに。早打ち解けて木綿四手の。神にぞ靡く大麻の。引く手あまたの心かな。く。

シテ詞 「如何に申し上げ候。うちつけなる御事なれども。やがて父母に逢はせ奉り。彼釣針をも尋ぬべし御心安く思し召され候へ。

ワキ詞 「さらばやがて伴なひ申し。宮中へ参り候ふべし。

地クリ 「かたじけなくも天の御神の御孫。わたづみの都に至り給ふ事。有難かりける御影かな。

シテサシ「然れば高垣姫垣調ほり。

地「高殿屋照りかゝやき。雲の八重畳を敷き。尊を請
じ入れ奉り。

シテ「父母の神いつきかしづき。

地「臨幸の意趣を語り給ふ。

クセ「我兄の釣針を。かりそめながら波間行く。魚に取
られて無き由を。歎き給へど其針に。あらずは取
らじと兎に角に。せうとを痛めさまぐくに。猛き

心の如何ならんと。語り給へば父の神。御心安く
思し召せ。まづ釣針を尋ねつゝ。御国に歸し申す
べし。

シテ「猶兄の怒りあらば。

地「潮満潮干の二つの玉を。尊に奉りなば御心に。任
せて国も久堅の。天より降る御神の。外祖となり
て豊姫も。たゞならぬ姿有明の。月日程なく。三
年を送り給へり。

ワキ詞 「かくて三年になりぬれば。 我国に帰り上るべし。
海路の案内如何ならん。

シテ詞 「御心安く思し召せ。 綿津見の宮主伴なひて。 海中
の乗物さまざまあり。

地 「大鰐に乘じはやてを吹かせ。 陸地に送りつけ申さ
ん。 其程は待たせおはしませ。(中入)

天女二人 「光り散る。 潮満玉のおのづから。 曇らぬ御影仰ぐ
なり。

地 「各玉を捧げつゝ。 く。 豊姫玉依二人の姫宮。 金
銀碗裏に玉を供へ。 尊に捧げ奉り。 彼釣針を待ち
給ふ。 綿津見の宮主持参せよ。

後シテ 「まうとの君の命に随ひ。 綿津見の宮主釣針を尋ね
て。 天孫の御前に奉る。

地 「潮満潮干二つの玉を。 く。 釣針に取り添へ捧げ
申し。 舞楽を奏し豊姫玉依。 袖を返して舞ひ給ふ。
(天女二人の舞)

地「いづれも妙なる舞の袖。く。玉のかんざし桂の
黛。月も照り添ふ花の姿。雪を廻らす袂かな。

シテ「わたづみの宮主。く。

地「姿は老龍の雲に蟠り。鹿脊杖にすぎり。左右に返
す袂も花やかに。足踏はとうくと。拍子をそろ
へて時移れば。尊は御座を立ち給ひ。帰り給へば
袂にすぎり。わたづみの乗物を奉らんと。五丈の
鰐に乗せ奉り。二人の姫に玉を持たせ。龍王立ち

来る波を払ひ。潮を蹴立て。遥かに送りつけ奉り。
遥かに送りつけ奉りて。又龍宮にぞ帰りける。